

愛媛大学医学部 同窓会会報

2015 NOVEMBER No.31

発行日/平成27年11月1日

編集発行人/高田 清式

発行/愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295

愛媛県東温市志津川

TEL(089)960-5989

印刷/原印刷株式会社

TEL(089)974-8711



表紙紹介

(写真上)愛媛大学医学部附属病院
平成26年4月 新ロゴに変更

(写真下)人工関節開発支援室
平成27年2月20日 設置

CONTENTS

会長挨拶	2
医学生による手術手技研修見学会開催	3
オープンキャンパス開催	3
卒業生からのメッセージ	4
新任教授からのメッセージ	6
愛媛大学医学部同窓会会則	7
愛媛大学医学部同窓会会則施行細則	8
愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項	8
第31回通常総会報告	9
海外医療研修に参加して	10
医学祭を終えて	11
同窓会報告	12
支部紹介	13
医学部附属病院前に「ホスピタルパーク」完成	15
医学部医学科人事異動	15
お知らせ	16



高田 清式

(昭和56年卒・3期生)

全国的に類まれなる台風や豪雨が初夏から続きましたが皆様お変わりございませんでしょうか。安保法案、欧米の経済危機、難民問題、TPP問題、東京オリンピックの競技場再検討など国際的にも課題の多い年です。医療の分野ではノーベル生理学・医学賞を日本人が今年も受賞したなどの話題もありました。さて昭和48年に創設されたわが愛媛大学医学部は、さらなる発展を目指し42周年目になり、この3月には第37期生が学窓を巣立ち(医師国家試験の今年の合格率は89.4%で国立大学平均91.4%に比し残念ながら昨年同様不振、次回捲土重来を期待)、国内外のそれぞれの医療現場で会員の皆様が毎年積極的な活躍を行っておられます。益々の会員皆さまのご活躍を期待しております。大学の近況としては、教育面では「地域特別枠自己推薦(推薦B)」での平成21年度から導入された奨学生枠の入学者が今春卒業し(初期は定員10名、現在は今春から20名)目下初期研修にて研鑽を積んでおります。現在は、一般入試65名、推薦A(学校推薦)25名、推薦B20名、学士2年次編入5名の計115名が1学年あたりの定員になっております。このように学生の人数も90人だった時代より増加しており、より一層の医学教育の充実を図る必要性を感じているところです(推薦Bは平成18年度から3年間は奨学金制度はなし)。また、地域医療に従事する医師確保を目的に平成24年4月に地域医療支援センターを開設し(県の委託)軌道に乗りつつありますが、新たに寄附講座として地域小児・周産期学講座を設置し、愛媛のさらなる周産期・小児医療の充実を図りつつあります(地域医療支援センターのホームページ等もご参照願います)。また、今後は国際グローバル化に対応するため臨床実習の充実などが全国医学部の急務になり、日本医学教育学保障評議会(JACME)が発足し2023年までに医学教育が国際基

準に達しているかの認定評価を各大学が受ける必要となり、大学病院の各診療科とともに県内の各病院での臨床実習も質量の点でもさらに充実させつつあります(臨床実習後のPCC-OSCEも実施)。今年度は韓国の医学生を臨床実習に受け入れましたが、さらに当大学からも来年度から韓国に臨床実習生が幾人か研鑽に行く予定です。なお、良き伝統行事になった第5回目の白衣授与式を本年4月23日に全5年生に(臨床実習開始前)厳かに挙行了しました(医学部や総合臨床研修センターのホームページをご参照ください)。基礎医学分野の教育面では、文部科学省Good Practiceに当大学の「医学・医療の高度化の基盤を担う基礎研究医の養成」が3年前に採択され、今や順調に実行され多くの医学生が研究に切磋琢磨し全国学会や欧文論文掲載で活躍し、文科省の中間評価もS(採択10件中2件のみ)と全国的にも極めて高い評価を得ています。なお、今年度から国際基準の観点に立ち臨床実習期間の増加を踏まえ授業時間が90分から60分に短縮されました(その代わり6~7コマ/日あり)。創設時講義時間が110分だった頃(当時小林讓内科学第一講座初代教授が全国の100分授業より4コマ1日40分多く学習できると話されていました)とは隔世の感があります。わが同窓会としても、医学部の発展のためにより多く寄与できるように今後も頑張る所存ですので何卒宜しく願い申し上げます。また、今回も遠方の会員の皆様に大学をよく知っていただくことを目的に、私ども附属病院総合臨床研修センターが毎年作製しております「専門研修案内」を、三浦現病院長とも相談し今年も会員の皆様に同封し配布いたします。大学病院の近況のご理解に役立てば幸甚です(なお、29年度から専門研修制度が改変され、来年の「専門研修案内」には目下当大学病院で策定しつつある新専門医養成プログラムの具体的内容を組み込む予定です。これを機に大学へ戻って来られる会員の方、大歓迎です)。最後になりますが、この激動の年、皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

医学生による手術手技研修見学会開催

平成27年7月8日(水)、医学部附属手術手技研修センターが、若手医師への実践的な手術手技研修を医学生に公開し、総勢130人の参加がありました。

この見学会は、早い段階から手術に関心をもってもらい、地域の外科医不足の解消に繋げることを目的に開催したもので、医学生に公開するのは初めてとなります。

参加した学生は、献体されたご遺体を使って、若手医師が手術手技を学ぶ様子や教授による指導の様子、若手医師による手技を間近で見学しました。当日は、腹腔鏡を使った胆のう摘出術や外傷止血術などの実技指導に対し、若手医師は真剣な表情で取り組み、参加した学生も熱心にメモを取るなど、それぞれが貴重な経験をしました。

本センターは、医師の手術手技を向上させることを目的に、平成25年12月に設置され、厚生労働省からの支援を受けながら、全国に先駆けた取り組みを実施するなど、高い評価を受けています。引き続き、地方でも高度な研修を受けられる本センターを活用し、県内の医師不足解消に繋げるとともに、若手医師が安心して安全かつ高度な手術手技を習得できるよう支援していきます。



手術手技を学ぶ若手医師とそれを見学する医学生

オープンキャンパス開催

平成27年8月7日(金)、
医学部重信キャンパスにおいて、オープンキャンパスを開催しました。

晴天にも恵まれた当日は、愛媛県外からの参加者も多く、医学部に興味がある人や来年度の入学を目指す人など、総勢約340人の参加がありました。

オープンキャンパスでは、医学科と看護学科に分かれて各学科の紹介や学生生活に関する話のほか、入試制度の説明などを行いました。入試制度の説明においては、説明者の発言をメモする参加者も多くいました。また、入学後のカリキュラムの説明やサークル活動等の紹介もあり、参加者は、それぞれに入学後の自身のキャンパスライフをイメージしている様子でした。

続いて、大学の授業を体験する模擬授業が行われました。医学科では、今年の4月から1コマ60分の授業となっており、それと同様の形式で講義が行われました。総合医学教育センター長の小林直人教授が講師となり、参加者との質疑応答など、対話形式による授業が展開されました。

午後には、医学科・看護学科で体験実習が行われました。医学科では、各講座の研究室を訪問し、実際に実験や模擬体験を行うなど、入学後に皆が取り組む研究の基礎的な手法や先輩が取り組む研究の一部に触れる



ことができました。また、附属病院の救急科外来を見学した参加者は、救急の現場で行われている治療や対処法など、説明する医師の話に熱心に耳を傾けていました。看護学科では、高齢者の運動機能の模擬体験や血圧測定のほか、小児医療における看護師の役割などを学びました。

卒業生からのメッセージ



萬家 俊博(昭和59年卒・6期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 麻酔・周術期学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、6期生の萬家俊博と申します。平成27年4月1日付けで、麻酔・周術期学講座の教授を拝命いたしました。卒業後ストレートで麻酔学教室に入局し、2年間の大学病院研修後、愛媛県立今治病院で4年間、大学で3年間(うち1年間は米国オレゴンヘルスサイエンス大学留学)、愛媛県立中央病院で4年間という経歴を経て、1997年に大学に戻ってからも現在までずっと麻酔科医として働いて参りました。この間、講座の名称は「麻酔学」、「麻酔・蘇生学」、「生体機能管理学」、「麻酔・周術期学」と変遷してきました。麻酔科の専門領域としては、手術室の麻酔管理、集中治療管理、痛みの治療の3つの柱があります。私はこの3つの主要領域の修練を積むとともに大学病院の医療安全管理や手術部門管理にも携わってきました。名前の通り「なんでも屋」として頑張っております。

病院の手術医療を支える臨床業務に加えて、研究や教育にも目配りをしなければいけなくなり、今まで以上に仕事押し寄せてくる感覚に必死で対抗している状況です。私の一番の関心事はやはり周術期の患者の安全を麻酔科医がいかにか守るか、ということにあります。手術前の患者の全身状態の評価、手術中の適切な麻酔管理、手術後の状態変化に的確に対応できる集中治療管理、を麻酔科医が担うことで、安全で質の高い手術医療を提供できると思っています。

この「麻酔科学」「麻酔科医療」の魅力を知ってもらい、同じ道を目指す仲間を増やすために、卒前教育と卒業後臨床研修教育にも力を入れています。高機能患者シミュレータという実物大のマネキンを用いて、全身麻酔の導入から覚醒までの流れと薬剤の効果を実感してもらうシミュレーショントレーニングや麻酔中や人工呼吸管理中に突発的に発生する危機的状況に対応するシナリオトレーニングを行っています。このような教育を通して、気管挿管やマスク換気などの医療技術だけでなく、患者急変時に的確に柔軟に対応できる能力を身につけることができます。

我々の教室から質の高いトレーニングを受けた麻酔科医が数多く育ち、愛媛県内のすべての基幹病院の手術医療の安全と質の向上に寄与する人材を増やしていくことが、私の使命だと考えています。同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りたく存じます。よろしくごお願い申し上げます。



間島 直彦(昭和62年卒・9期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域医療再生学 教授)

愛媛大学医学部同窓生の皆様、医学科9期生の間島直彦です。東予宇摩地区における地域医療の充実を目的として2010年より愛媛大学医学部に開設された「地域医療再生学講座」の教授に2015年4月に選任されました。卒業後は愛媛大学医学部整形外科教室に入局し、骨折などの外傷、各種関節鏡、人工関節、脚延長術などの治療に携わりました。

現在は、四国中央市のHITO病院内にある地域医療再生学講座サテライトセンターと大学病院で診療しております。

四国中央市ではHITO病院での整形外科診療に加え、宇摩地域における高齢者骨脆弱性骨折の一次予防、二次予防を目標とした骨粗鬆症リエゾンサービスの展開やロコモティブシンドロームという運動器疾患に関する啓発活動に取り組んでいます。活動は2年目となり、HITO病院、四国中央病院、宇摩医師会や四国中央市の協力を得て徐々に浸透しております。

「地域医療再生学講座」のもう一つの目的は、地域特別卒の学生や宇摩地区での地域医療を志す学生の受け皿となる病院の整備です。地域医療に従事できる環境を提供するだけでは無く、高い専門性などキャリア形成上の不安を解消することが重要になります。HITO病院は愛媛大学人工関節センターサテライト病院となり、すでに宇摩地区における人工関節手術の拠点となっています。

大学においては、2014年1月からスタートした愛媛大学附属病院人工関節センターの副センター長として、人工股関節の初回手術と再置換手術にあたっています。国立大学病院初の人工関節センターは、臨床、研究開発、手術教育、オステオサイエンスという4つの部門で構成され、臨床・研究・教育の統合型センターを大きな特徴としています。所属する臨床部門では、Navigationを用いた正確な手術、筋肉を切開しない最小侵襲手術、高難度の人工関節手術に対応しています。年間約200名を越える患者さまに、関節痛からの解放、関節機能の改善、日常生活への早期復帰を提供し、最終的には健康寿命の延伸を目指して活動しています。高度で確実な人工関節医療を、ご紹介頂いたすべての患者さまに提供できるように努力してまいります。

今後も同窓会の皆様のご協力ご支援をお願いいたします。



檜垣 高史 (昭和63年卒・10期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域小児・周産期学 教授)

同窓会のみなさま、こんにちは。私は、10期生の檜垣高史(ひがきたかし)と申します。この度平成27年4月1日付けをもちまして、愛媛大学大学院医学系研究科 地域小児・周産期学講座 教授を拝命いたしました。愛媛大学医学部の卒業生の一人として貢献できるように努力してまいりたいと思います。

私の本籍は今治、生まれは松山、育ちは香川県の高松と善通寺で、香川県立高松高等学校を卒業後、愛媛大学医学部に入学いたしました。昭和63年に卒業後、小児科学教室に入局し、愛媛大学での研修を経た後、県立中央病院周産期センターの初代スタッフの一人として赴任し、その後、県立中央病院小児科などに勤務いたしました。小児循環器をサブスペシャリティーとしてめざし、東京女子医科大学心臓血管研究所に留学させていただき、留学後は、愛媛大学において、NICUの立ち上げや、循環器病センターの立ち上げに携わり、小児循環器部門を確立させるべく努力しているところです。今では他県や海外からも研修に来ていただけるようなチームになってきています。

愛媛大学小児科は、昭和48年に、初代の松田博教授により開講し、平成6年から貴田嘉一教授、平成19年から石井榮一教授に引き継がれています。関連病院も含めて小児科医局員も少しずつ増加して、発展してきております。小児医療を取り巻く環境は、時代の流れとともに複雑高度化しており、周産期医療、小児救急医療、専門診療、地域医療、さらには小児保健、キャリアオーバーなど、たくさんの課題があり、そのニーズは拡大してきております。そこで、多くの方々のご尽力により、この度本講座が開設されることになりました。この講座に期待される任務は大きく、とても身の引き締まる思いですが、小児科学講座と一体になって愛媛県全体の小児医療をさらに活性化して、地域医療と専門医療のバランスをうまくとりながら、少しでも前進していけるように、この講座の開設が愛媛大学全体の活性化の契機になれるように貢献したいと考えています。

話は変わりますが、私の趣味は、学生時代から続けている卓球です。小さな大会ですが年に何回かは試合に出場します。なかなか練習する時間がとれませんが、ラケットを握っているときの自分はとても楽しそうです。私が愛媛大学医学部の卓球部に入部したのは、あらためて振り返ってみますと、もう30年も前になります。現在、この卓球部の顧問をさせていただいていますが、学生時代を過ごしたこの卓球部の顧問をさせていただけることはとてもうれしいことです。学生時代より磨きのかかった腕前とカモシカのようなフットワーク(これができるのと勘違いしているところが危ない)で、大奮闘しているのが私です。ときどきですが、練習に参加させていただけたらと思いますのでよろしくお願ひいたします。

もともと不器用ですが、もちまへの機動力を生かして、論で語るより汗で語るつもりで、がんばってみたいと思います。微力ではございますが、本学発展のために尽力する所存ですので、同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。



白馬 伸洋 (平成3年卒・13期生)

(帝京大学医学部附属溝口病院 耳鼻咽喉科 主任教授)

平成28年1月1日より、帝京大学医学部附属溝口病院耳鼻咽喉科主任教授を拝命しました、13期生の白馬伸洋です。愛媛大学同窓生の先生方には、これから色々な場面でお世話になると思いますので何卒宜しくお願ひ申し上げます。また、赴任時には愛媛大学同窓会東日本支部会に参加させて頂いたばかりでなく、関東在住の先生方はもちろんのこと、中部地方、そして遠くは金沢からお越し頂いた多くの同級生の先生方にお祝いの会を催して頂き、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。関東では様々な分野でご活躍されている愛媛大学同窓生の諸先輩方がたくさんおられます。関東は初めての地で、右も左も分からない自分にとりましては、そのような諸先輩方とお会いできましたことはとても心強く感じました。本当にありがとうございました。

私は耳鼻咽喉科医として、耳科手術では世界一の術者になることを目標に、神戸中央市民病院、愛媛大学附属病院、市立宇和島病院、そして大阪赤十字病院で研鑽に努めて参りました。帝京大学医学部附属溝口病院は私立の分院ではありますが、病院としては本院と全く独立した組織です。国立病院とは違ってしがらみは少ないですが、その分、医師としての技量を強く問われる環境にあります。病院自体はとても古いですが、現在建て替え工事中で再来年の4月にはリニューアル予定です。

病院がある川崎市の人口は142万人と、144万人の愛媛県とほぼ同等です。病院の立地を考えますと、東京23区と横浜から近いばかりでなく、羽田空港、成田空港からのアクセスも便利ですので、国内外から多くの患者さんをお呼び込めるポテンシャルを有していると考えております。

病院がある川崎市の人口は142万人と、144万人の愛媛県とほぼ同等です。病院の立地を考えますと、東京23区と横浜から近いばかりでなく、羽田空港、成田空港からのアクセスも便利ですので、国内外から多くの患者さんをお呼び込めるポテンシャルを有していると考えております。

今後は愛媛大学に負けないように、質的にも量的にも全国唯一無二の耳科手術が行える施設を目指して頑張っていきたいと思っていますので、耳科手術を修得したいと考えている愛媛大学の学生がいましたら、是非一度、病院見学に来て下さい。愛媛大学同窓会の諸先生方には、今後とも変わらずご指導・ご鞭撻賜りますよう宜しくお願ひ申し上げます。



大八木 保政

(愛媛大学大学院医学研究科 老年・神経・総合診療内科学 教授)

平成27年5月1日付けで、老年・神経・総合診療内科学の教授を拝命しました大八木保政と申します。

私は福岡市の生まれですが、育ちは18歳までずっと長崎市でした。県立長崎北高卒業後、共通一次試験初年度の昭和54年に九州大学医学部に進みました。昭和60年(1985年)に卒業後、九大神経内科教室に入局しました。我が国の診療科としての神経内科の歴史は浅いですが、1964年に九州大学医学部附属病院に初代黒岩義五郎教授が看板を掲げたのが始まりです。卒業する時に、30年後にメジャーとなる分野で研究もしてみたいということで神経内科医を志しました。その30年後の現在ですが、メジャーとは言えないまでも一応は世間的に認知されるようになりました。しかし、愛媛・四国では神経内科専門医が非常に少なく、その重要性や必要性をアピールしていきたいと思います。神経内科は、脳、脊髄、末梢神経、筋肉と疾患の数や範囲が広く、また病態機序も、変性、免疫、代謝、遺伝など多種多様であり、学問的フロンティアが広大な分野です。

老年・神経・総合診療内科学講座は1997年に三木哲郎先生が初代教授として着任された老年医学講座が始まりです。1999年1月に医学部附属病院に老年科が開設され、同年9月より老年科内に神経内科が充足しました。老年医学講座は、加齢制御内科学講座を経て、2013年4月より現在の名称に変更されています。また、私は認知症の診療・研究に長年携わっており、老年医学は重要な学問的分野と考えています。教室運営では、学生教育、神経内科専門医の育成は当然として、研究面では、神経疾患の分子病態解明と新規治療薬の探索、遺伝性神経疾患の解析、および神経幹細胞やiPS細胞などによる神経再生技術の研究などを少しずつ充実していきます。さらに、若手医師の豊かな発想や興味を大事にして「自由闊達」をキーワードに居心地の良い教室を築きたいと思います。大学時代は全学の航空部(グライダー)に所属していました。普段きさくに付き合いながらも、飛行訓練時は緊張感漂う雰囲気が好きでしたので、医局でも家庭的な雰囲気とともに、診療や研究面では緊張感も大事にしたいと思います。

愛媛大学同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



杉山 隆

(愛媛大学大学院医学系研究科 産科婦人科学 教授)

この度、平成27年9月1日付けをもちまして、愛媛大学大学院医学系研究科病因・病態領域産科婦人科学講座教授を拝命致しました杉山隆です。

私は、京都で育ち、昭和63年に関西医科大学を卒業後、三重大学医学部産科婦人科学講座に入局しました。その後関連病院で研修し、大学院生活は生化学講座で過ごし、平成5年に三重大学大学院医学系研究科機能系生化学専攻を修了しました。平成24年からは、東北大学に異動し、この間各大学における診療科、研究室、地域における周産期医療連携の基盤確立・発展に関与して参りました。

産婦人科学は、女性のあらゆるライフステージをサポートする学問体系であり、いくつかの専門分科された領域、すなわち生殖医学、周産期医学、腫瘍医学、女性医学等より成り立っています。私の専門は、主として周産期医学と内分泌学、女性医学といった領域ですが、各専門領域は互いに関連しており、専門領域に偏らない広い視野を持った医師を育成することが重要と考えています。また、大学病院の理念である「患者から学び、患者に還元する」を大切にします。この理念は、患者さんに最善の医療を提供し、患者さんに喜んで頂き、そして医療者も喜びを分かち合うといった医療の原点に通じます。

臨床面において、周産期領域では母体合併症や胎児異常に対する多職種によるチーム医療を行うとともに、腫瘍領域では内視鏡手術を悪性腫瘍疾患へ拡充しています。生殖領域では、現在は生殖医療を停止していますが、今後再開へ向けて鋭意準備を進めたいと考えています。研究面では、周産期医療や腫瘍医療に関する多施設共同臨床研究を積極的に行うとともに、妊娠糖尿病や妊娠高血圧候群の病態に関し炎症の視点より、また子宮内環境と将来の生活習慣病発症に関しエピジェネティクスの視点より基礎研究を行って参りたいと思います。

産婦人科は、他科の先生方を含めた多職種との連携が特に大切な科です。大学としての診療・教育・研究を行いながら、県下の関連施設との連携も密にし、地域医療の維持・発展のために全力を尽くす所存ですので、同窓の先生方のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

海外医療研修に参加して

■ 朝雲 杏里 (6年生)

(中央)

2015年3月、私は医学教育振興財団のプログラムを通して、英国オックスフォード大学医学部総合内科にて1ヶ月の病院実習をしました。入学当初より目標としていたこのプログラムへの参加は、学びの多い素晴らしい経験となりました。熱心に指導して下さる先生方や、忙しい合間を縫って私に「英国らしい経験」をさせてくれるオックスフォード生、一緒に生活する他国からの留学生と過ごす1ヶ月はととても新鮮で、新たな発見の連続でした。毎日、医療面接やカルテ記載、身体所見取り、回診時のプレゼンテーションなどを行い、日本でのポリクリでの経験も生かすことができました。滞在中、他に適切な派遣生がいたのではないかと自問することもありました。数ある留学先の中で第一希望のオックスフォードに派遣していただけた幸運を噛みしめると共に、今後同じような機会が巡ってきた時には、運ではなく実力で掴み取ったのだと自信を持って言えるよう、毎日を真剣に生きなければと思いを新たにしました。最後になりますが、本当に多くの方々のご支援のもと、夢が実現しましたこと、心より感謝しています。本当にありがとうございました。



■ 谷口 絵美 (5年生)

(中央右から3番目)

私はこの春休みにEHCプログラムに参加し、多くの貴重な体験をすることができました。アメリカの医療を学ぶ一環として、臓器移植のレシピエントやコーディネーターの方々との交流、医療工学や医学教育制度に関する講義、現地で働く日本人医師のお話を伺う機会や、医療倫理問題を題材にしたディスカッション等がありました。さらに、フリークリニックを見学させて頂き、スタンフォード大学の医学生や医師がボランティアとして従事する様子を目の当たりにしました。バックグラウンドも将来像も様々な医療スタッフの方々とお話することで、しっかりした考え方や価値観に目の覚めるような思いをしました。



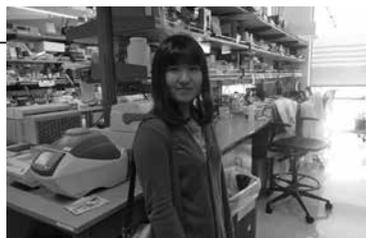
また、今回の滞在は、何よりも自分の英語力について省みるきっかけとなりました。何度も自分の言いたい事がうまく伝わらない、悔しくてもどかしい思いをし、今後の英語学習の大きな原動力につながりました。

毎日が新鮮でとても密度の濃い、充実した2週間でした。積極的に刺激的な、素敵な仲間と出会い、多くの人と意見を交わすことで影響を受け、視野が広がりました。そして、これからの学生生活での明確な目標を得ることができ、多くの面で自分を成長させる良い機会となりました。

最後に、このような素晴らしい体験をするにあたり、支えて下さった皆様に心より感謝致します。

■ 堀内 美香 (4年生)

2015年、4回生を控えた春休み、私はスタンフォード医療研修に参加しました。今回のプログラムで、私は日本全国から集まった医学生と共に、サンフランシスコとスタンフォード大学に一週間ずつ滞在し、臓器移植・医学教育制度・医療保健制度・セクシャルマイノリティについて学ぶと同時に、基礎研究室の見学・大学病院の見学・スタンフォード大学の医学生との交流をはじめとする様々な活動を行い、アメリカの医療と日本の医療の違いについて理解を深めました。



特に印象に残っているのは、スタンフォード大学で研究をしている日本人の先生を訪ねたことです。私は将来、研究目的で海外留学をしたいと考えています。そのため、実際に海外で研究をしていらっしゃる先生に仕事のことや海外での生活のことなど様々なことを教えていただける機会を得たことは私にとって大変有意義でした。漠然としていた自分の将来をより具体的に考えることができるようになりました。もう一つは臓器移植問題を考えるために実際にドナーの家族、レシピエントの方をお招きしてお話を伺えたことです。会食でレシピエントの方の生の声をすぐそばで伺ったときは、思わず涙を流してしまうほど心を動かされました。”Life is a gift”という彼女の言葉には、その言葉以上の重みがありました。医療の根底にある「命とは何か」について改めて考える良い機会となりました。

また、意識の高いスタンフォードの学生やプログラムの参加者との生活は毎日が刺激的でした。仲間達との英語でのディスカッション、講義の後の白熱した質問タイムなども私にとっては貴重な勉強でした。知りたいことを質問する力、自分を表現することのおもしろさを彼らから学びました。そして、一生関わっていききたい友になりました。そんな素晴らしい仲間達と出会えたことは私の一生の財産です。遠く離れていてもお互いを刺激し合える友の存在は、私の今後の人生において大きな支えになると確信しております。

今回、このような貴重な体験をさせていただいたことを大変嬉しく思います。応援してくださった全ての方に感謝申し上げます。また、この研修に参加させていただくにあたり同窓会からご支援をいただきました。本当にありがとうございました。

海外医療研修に参加して

■ 村田 夕紀 (4年生)

(右側)

2015年3月10日から31日まで、ベルリンのFranziskus Krankenhausの泌尿器科(Urologie Station 4a)で臨床実習を行いました。日本では考えられない事ですが、ドイツでは、医学生が指導医の立ち会いなしに1人で採血することが許されているので、私も毎朝、多い時には15人ほどの採血を担当しました。その他にも、外来での補助やドクターシャドーイング、TUR-B、ESWL、TOTの見学に始まり、前立腺癌の回腸導管手術の助手、膀胱癌の患者さんに対しては癌の告知の場面に立ち合うなど、非常に濃密な実習をすることができました。



実は、2年前の3月、ドイツのUniversitat Dusseldorf医学部から、はるばる愛媛大学医学部に留学していたJuliaという医学生と知り合いました。彼女は私と同じ学生寮の隣の部屋に滞在し、日々頑張っていました。当時、解剖学実習中の私は体力的、精神的に疲れていたのですが、そんな私を明るく励ましてくれたのがJuliaで、彼女の励ましで、毎日勉学に励むことができました。それから時は過ぎ、彼女がドイツで泌尿器科医になって半年後、病院実習を兼ねて来てぬいぬいと誘ってくれたことから、今回の実習が実現しました。

Juliaとの出会いがドイツの病院での臨床実習に結び付いたのですが、2年前、愛媛大学医学部でドイツからの留学生を受け入れてくださっていなければ、実現しなかったと思います。留学生受け入れには、小林直人先生のひとかたならぬご尽力があったと伺っております。この場をお借りして心から御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

医学祭を終えて

第39回愛媛大学医学祭実行委員長 寺下 誠人



今年5月23日、24日に医学祭を開催させていただきました。今年で39回となった医学祭ですが、今までの先輩方が作ってきた医学祭に劣らぬ最高の医学祭にするため、実行委員会一同準備に取り組んでまいりました。こうして第39回医学祭を無事終えることができたのも、在校生、OB・OGの方々、大学の先生方、職員の方々、そして地域住民の方々のご協力と暖かいご声援であると思っております。

私たちは、第39回医学祭のテーマを「無限大」とさせていただきます。このテーマは「豊かな自然と温かい人情あふれるこの愛媛でまだ力のない学生でも一丸となれば無限大の可能性がある。」という思いを込めております。

近年、医師の偏在や医療格差の広がり、高齢化などにより地域医療の重要度がますます上がっており医療従事者、患者様はもちろんのこと、その家族や地域とのつながりを大切にすること重視されてきていると思います。そのため、今回の医学祭が学生のみならず様々な方々が愛媛を知っていただくためのきっかけとなればと考えております。この愛媛県の自然、温かな人の気質にかかわることで、医学を学ぶ私たちは研究への興味や夢が無限大に広がり、患者さんへの思いやりを持った対応や治療につなげていけるのではないのでしょうか。

また、講演会では一般財団法人新居浜精神衛生研究所付属属岡台病院の枝廣 篤昌先生にお越しいただき、「笑いのチカラ」を、内部講演には愛媛大学大学院医学系研究科薬理学講座の前山 一隆教授に「アレルギーの話『花と蜂とマスト細胞』」をテーマにご講演をしていただきました。想像しやすい身近なテーマからご自身の研究分野をわかりやすくご講演していただいたため、学生のみならず性別、様々な年代間はず関心を抱いていただける講演会となったと思います。

そのほかにも、去年に引き続き愛南町と内子町の方々の特産物を販売していただいたり、サークルバザーやキャンパスツアーや看護科1日体験実習など様々な企画で大盛況を呼びました。

どの企画においても、私たち実行委員の力だけでは到底なし得ることはできませんでした。地域の方々や諸先生方をはじめ、多くの方々のご理解とご協力のおかげで、第39回医学祭は成功を収めることができたと思っております。

今年は少し雨が降ったものの小雨で終わり、比較的過ごしやすい気候で全日程を無事終えることができました。医学祭の後、多くの学生に「ありがとう」、「本当に疲れ様」という声をかけてもらい、実行委員として最高の喜びを感じました。今年の経験を来年の実行委員となる後輩たちに引き継ぎ、今年以上の医学祭を作ってもらいたいと思います。

最後に、これまでご協力してくださった皆様方、本当にありがとうございました。実行委員一同心より感謝申し上げます。

11期生同期会 報告

平成26年8月16日、大和屋本店にて4回目になる11期の同窓会を開催しました。

また、羽藤直人先生の愛媛大学医学部耳鼻咽喉科教授就任のお祝いも兼ねていましたので、入学が一緒や途中で一緒だった面々にも声をかけ、随分無沙汰していた人たちが大勢参加し62名集まりました。男性49名、女性13名。26年の歳月を経ても学生時代のテンションはそのまま(さすがに一気!はありませんでしたが)、見た目も「特に変わりなし~頭部にやや変化あり」の程度だったのですぐに懐かしさがこみ上げてきました。スピーチでは、まず羽藤先生にお祝いの言葉と当時のチャラいエピソードなど暴露、現在の仕事・家族・健康状態など近況を報告し合いました。小野里康博さんは入学時から変わらないおじさんのままで、普通に年齢を重ねた誰よりも若々しく、本人は「(見た目年齢)勝ったなと思った」と小さな喜びをかみしめていました。50歳を超えて、それぞれの舞台上で活躍し続けている皆さんの今後がますます楽しみになりました。この会の後、佐藤俊哉さんが北里大学医学部実験動物学単位教授に就任されたと連絡がありました。次回同窓会(平成30年予定)もお祝いがたくさんあると思うので、皆さん参加してくださいね。



(文責 樋口志保)

17期生同期会 報告



第17期卒業20周年記念同窓会報告

8月8日に松山全日空ホテルで同窓会が開催されました。4月にアナウンスをしたところ、反応がほとんどなく開催が危ぶまれましたが、佐々木さんのお陰で最終的には49名(学生生活を大いに謳歌した3名含)が集結。大変身を遂げた者はいなかったものの、概して男性陣は大きく成長。しかし、そんなことをよそに昔話に花を咲かせた一夜でした。5年後の再

会を約束し解散。目指せ、全員集合!

卒業25周年記念同窓会のお知らせ 日時:平成32年8月8日 場所:全日空ホテル?

最後列左より大塚博紀、村上忠司、井手昇、紀伊典克、大木元明義、藤野晴彦、松本元、山本康明、濱田信、三宅康之、渡辺太志、渡邊誠治、山田明弘、熊木天児。山本幸司、兵頭純、今岡大也、大森拓朗、山之内純、坂田亮介、木下貴史、田口康智、篠森裕介、黒光正三。横田智行、脇坂浩之、田坂嘉孝、竹中美恵、三好加容、松本佳子、原裕子、湯浅一郎、長戸重幸、田中裕子、堀木充、安部智宏、佐々木英樹、鈴木伸明。軸原絵理子、長谷部昌、石川真紀、堀川順子、菊池清香、佐々木美穂、中山晴美、河相恵子、瀬川明子、原美幸、入澤友美。

(文責 熊木天児@万年幹事)

2期生同期会 報告

平成27年8月24日に「二期生全員還暦以上祝賀会」が十五万石で開催され、県内はもとより県外からも参加があり、合計25人で賑やかに行われました。長老の三好先生のように今年で古希となる人もおり、「いつまで皆と会えるか分からないので同期会を毎年しよう」という提案や、色々な病気を挙げ「やはり医者の友達は有り難い」という病気自慢なども交えながら元気に全員が近況報告をしました。還暦とはいえ皆気力に溢れ、医療の第一線で活躍しており、新しい検査法、治療法や新しい概念等を披露し、“老人パワー炸裂”という雰囲気の良い集まりでした。今回出席出来なかった級友からのメッセージも回し読みで披露され、噂話や昔話に花が咲きました。



(文責 松田正司)

第13回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

第13回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会は平成27年1月24日にアルカディア市ヶ谷(東京都千代田区)で開催されました。

今回は13期生が担当幹事で司会進行。幹事によるミニレクチャーは国立障害者リハビリテーションセンター眼科医長の西田朋美先生から「ロービジョン」と諏訪赤十字病院第二泌尿科部長の栗崎功己先生から「頻尿の人がきたら」でした。



特別講演は、ロンドンオリンピックゴールボール金メダリスト浦田理恵選手より「夢への挑戦」と13期の東海大学体育学部競技スポーツ学科宮崎誠司教授(整形外科)より「柔道の外傷・障害と予防」で、ALL JAPANの話を楽しましました。



13期生の白馬伸洋先生(空手部OB)は本年1月から帝京大学溝口病院耳鼻咽喉科主任教授に就任されました。浦田選手の金メダルをかけてもらい、幸せの絶頂でした。今年も楽しく皆が集まり、幸せです。なお、FaceBookに愛媛大学医学部医学科同窓会のグループがありますので、御気軽に御参加下さい。

(文責 幹事長 酒向正春)

第7回愛媛大学医学部同窓会中国支部総会 報告



平成27年5月30日、ホテルグランヴィア岡山で第7回中国支部総会が開催されました。この会は2年に1回、広島、岡山で交互に開催しており今回は岡山での開催でした。参加者は1期生から29期生まで総勢31名。支部代表下原康彰先生(1期生)の挨拶で始まり、愛媛大学医学部分子寄生虫学教授、鳥居本美先生(1期生、岡山県出身)より記念講演を賜りました。

先生が力を注がれているマラリア研究(マラリア原虫の標的細胞侵入機序の解明や伝搬阻止ワクチン候補抗原の検索など)のお話には一同大変興味をそそられていました。また愛媛大学本学、医学部の現状をたくさんの写真で説明していただき、懐かしさと同時に変貌した風景の映像に皆感慨深く見入っていました。その後全員からの近況報告があり、楽しく懇親会が行われました。

翌日、岡山カントリークラブ桃の里コースで親善ゴルフコンペを行いました。参加者6名と少人数でしたが初夏の爽やかな風の中楽しくプレーが行われました。

現在中国5県で400名近い卒業生が活躍しております。私自身お世話になった愛媛県に貢献できていないことを大変申し訳なく思っていますがそれぞれの地域でみんな一生懸命頑張っておりますのでご容赦いただきたいと思います。瀬戸内海を挟んだ対岸の地から愛媛大学医学部の一層のご発展を祈念しております。

1期生はついに還暦を迎えました。これからは次の世代へバトンタッチしていきたいと思っています。次回は2年後(平成29年5月頃)広島で開催いたします。さらに多くの先生方、特に若い先生方の参加をお待ちしております。

(文責 田辺耕三)

第6回愛媛大学医学部同窓会近畿支部総会 報告

第6回近畿支部総会が平成27年6月27日、大阪市のホテル大阪ベイタワーにて開催されました。

近畿支部は平成12年に同窓会最初の支部として発足しましたが紆余曲折あり、その後活動が停滞してしまい平成23年に再開、それからは毎年総会を開催してきております。そのため今年が第6回目というわけです。

今回は91名(前回は77名)の参加がありましたが、会場探しに苦勞するほど年々盛会となってきております。これもひとえに役員、幹事のみなさんの並々ならぬご努力のおかげと感謝しております。

今回、国立病院機構京都医療センター診療部長・泌尿器科科長 奥野 博先生に「熟年男性の健康と性生活」～女性にも聞いてほしい！知ってほしい！～と題した記念講演をしていただきました。先生の多数の臨床経験からのデータも踏まえ、ありがたいご講演を頂きました。会員の中にはもう還暦を過ぎた者も多くいろいろと身につまされるお話でしたが、結論としては家庭、夫婦の円満ということが健康においても一番重要であるというようなことではなかったかと合点のいく内容でした。

総会議事終了後は懇親会に移り、乾杯のあとはそれぞれ懐かしい顔、クラブの先輩後輩、また診療上のいろいろな情報交換など、あちこちに話の輪が広がっていきました。恒例となったグリークラブOBのコーラスも披露されました。

近畿支部は、近畿一円に居住、在職の方で構成されています。毎年多数の卒業生が就職してきていますが、個人情報保護の壁は厚くなかなか実態の把握が難しいところです。今回連絡の無かった方、そして同窓の情報をお持ちの方、また他地域の方でも近畿支部の総会っておもしろそうだお感じになった方、是非ご連絡ください。お待ちしております。

(文責 1期生 朴 信正 park618424@sunny.ocn.ne.jp)



第12回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会 報告

愛媛大学医学部の同窓生の皆さんお元気ですか。今年も愛媛大学医学部同窓会九州支部会を7月25日博多都ホテルにて行いました。出席者が17人と少人数でしたが、和気藹々とした雰囲気でした。今回は、福岡県8名、大分県4名、長崎県1名、熊本県2名、山口県1名、沖縄県1名の方が出席されました。

学術講演は、長崎大学 多文化社会学部准教授の野上 建紀(のがみ たけのり)先生に『海底に残された歴史の痕跡を探る』というタイトルで講演をしていただきました。九州の有田や波佐見焼から愛媛の砥部焼との関係を海底で発見された小さな破片からたどり着くという内容で、九州と愛媛の歴史的つながりを探ってゆく興味深い講演でした。(彼は小生の従兄弟で海外の発掘調査でなかなか日本にいることが少ない中、講演を引き受けてくれました)

残念ながら恩師の先生が出席されておりませんでした。乾杯の後、近況報告も交えながら自己紹介を行い、来年の再会を誓いました。

九州在住で同窓生の方がおられましたら、一人でも多く出席していただけるようご理解ご協力お願いします。毎年7月下旬の土曜日に同窓会を行っております。また、名簿作成も行っておりますのでご協力お願いします。

<事務局> すみい婦人科クリニック 澄井 敬成 (8期生) sumiic@k9.dion.ne.jp
九州支部長 角 典洋 (2期生) sumi-clinic@mx2.tiki.ne.jp



医学部附属病院前に「ホスピタルパーク」完成

平成26年4月1日(火)、医学部附属病院前に、
外来者を快くおもてなしする場「ホスピタルパーク」が完成しました。

このホスピタルパークは、本院が、県民の医療に関する中核施設としての風格を備え、病院を訪れる人々に心地よさを提供する美しい景観を形成することにより、清潔で開放的なことに加え、憩い、和み、癒やしを感じることもできる空間となることを目指して、整備を行ったものです。

ホスピタルパークは、次の5つのゾーンで形成されています。

「外観景観ゾーン」は、通勤・通学に利用しやすい快適な歩道環境となっており、町と本院の境界を仕切る緑のエッジ景観を創出しています。「いこいのゾーン」は、外来者の方々が休養、散策できるほか、地域住民の皆様に対しても公開緑地として憩いの場となるような展望広場となっています。また、「ロータリー及び本館前庭ゾーン」は、外来者をお迎えする開放的で明るい空間を形成しており、「中央ゲートゾーン」には、エントランス広場とリハビリパークを、「東ゲートゾーン」には、外来者を安全で快適に誘導するための遊歩道を整備しています。



季節ごとに咲く花々



エントランス広場にあるモニュメント
「ドット・イー」



東ゲートゾーンから続く遊歩道

パーク内には、桜や梅の木などの季節を感じさせる木々の他、ベンチも数カ所設置しています。今はまだ小さな木や花たちですが、四季折々の表情を見せながら成長し、本院への外来者だけでなく地域の皆様にとっても憩いの場となることを願っています。

是非、お立ち寄りください。

《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・ 同窓会名簿の作成
- ・ 定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・ 同窓会会費徴収のための業務
- ・ 事務連絡及び各種文書の送付
- ・ 支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2. 個人情報の提供

会員から情報の照会依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承ください。

3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 20名以上の参加
 2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
 3. 会費未納者への納入勧誘
 4. 3年に1回

★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644

入会金 1万円 終身会費4万円(合計5万円)

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第32回

愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：平成28年5月20日(金)18時～

場所：臨床第2講義室

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

TEL：089-960-5989 (受付10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp